

<実践報告>

キャリアプランニング能力の育成に向けた職場体験活動の予備的研究

原田恵理子・田邊昭雄・吉武幸恵
(東京情報大学)

A Preliminary study of workplace experience activities for develop career planning
ability

ERIKO HARADA・AKIO TANABE・YUKIE YOSHITAKE
Tokyo University of Information Sciences

キーワード：中学生 職場体験活動 キャリアプランニング能力

KEYWORDS : Work Experience Programs, Career planning ability, junior high school

抄録

本研究は中学 2 年生を対象とする職場体験活動においてキャリアプランニング能力の育成を目指すプログラムを開発し、教育委員会と学校、大学の連携のもと、授業者間でねらいを共有して 3 日間の実践を行いその効果について明らかにした。職場体験活動の実施前後に実践群 6 名、統制群 64 名のデータを用いて解析を行った結果、キャリア意識では実践群の「情報活用力」「意思決定力」が上昇した。基礎的・汎用的能力では、実践群の「自己理解・自己管理能力」が減少した。また、自由記述では、日々の学校生活や対人関係を大切にすることが自分の将来につながっていくと気づき、将来への目標を掲げる内容が多く、他者評定では、生徒の参加態度と授業内容が概ね肯定的な評価を得たことが示された。

1. はじめに

超高齢社会を迎え、IoT や AI (人工知能) が活用される第 4 次産業時代では、働き方が大きく変化することが予想されており、時代の変化を理解した職業の創造と選択、キャリア発達の形成など、新たな視点を加えたキャリア教育が必要になるとし、人材育成の在り方は重要な課題とされている(文部科学省 Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース, 2018)。第 3 期教育振興基本計画(文部科学省, 2018)でも、「社会的・職業的自立に向けた能力・態度の育成」が目標の 1 つとして明示され、学校教育現場においては、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てるといったキャリア発達を促すキャリ

ア教育を重視し（中央教育審議会，2009），育成すべき力として基礎的・汎用的能力が挙げられている（文部科学省，2011）。この基礎的・汎用的能力は，「人間関係形成・社会形成能力」，「自己理解・自己管理能力」，「課題対応能力」，「キャリアプランニング能力」の4つの能力で構成され，勤労観や職業観の形成を目指して教育の実践の中で工夫して育むよう学校や教師に求められている。その方法の代表的な一つに，中学校2年生で実施する職場体験活動がある。

現在，職場体験活動は，95%の公立中学校で実施され，学校から社会への移行のために必要な基礎的資質や能力をはぐくむ上で有効な学習の機会として位置付けられている（文部科学省，2011）。職場体験活動の有用性については，大学生に職場体験を回顧させた回答を検討した戸田（2016）と小川・岡田（2018）が，キャリア教育に一定の有用性があることを指摘している。これ以外に，職場体験活動は進路成熟と自律的高校進学動機を向上させ（山田，2011），望ましい職業観・勤労観及び職業に対する知識や技能の獲得とともに，主体的に進路を考えるための自己理解・自己管理能力の育成を図ること（千葉市，2017）に効果があると報告されている。

このような職場体験活動の成果がある一方，職場体験先の偏りや実施の活動の形骸化が指摘され，生徒にとって新鮮な体験，生徒の実態に即した創造性ある実践（文部科学省，2011；千葉市，2017），勤労観の育成を基盤とした職場体験活動の意義や，生きていくことと働くことの関連や意味について深く考えさせる事前指導の必要性（戸田，2016）が課題であると指摘されている。なかでも，勤労観の育成や生きていくことと働くことの意義を生徒の生きている社会の実態にあわせて創造性ある実践にするためには，キャリアプランニング能力の育成が重要になってくると考える。キャリアプランニング能力とは，「働くこと」の意義を理解し，自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け，多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら主体的に判断してキャリアを形成していく力であるとされている（文部科学省，2011）。具体的には，「学ぶこと・働くことの意義や役割の理解」，「多様性の理解」，「将来設計」，「選択」，「行動・改善」といったことが含まれている。

このキャリアプランニング能力を中学生で育成するのは非常に意義がある。なぜなら，高校・大学でキャリアプランニング能力の育成をする傾向にあるが，すでに，この時期の発達段階は，キャリアに関連した選択肢を検討する能力があり，自分の将来に関心を持っているにもかかわらず，キャリア・プランニングの過程で多くの課題に遭遇する傾向があるからである（Angela et.al, 2004）。これらの課題は個人のキャリア関連の意思決定を遅らせる，あるいは回避する原因となり，理想的ではない選択肢になり，また，キャリアの意思決定プロセスの間に遭遇した課題は，準備の欠如，情報の欠如，信頼できない情報，自信やコミュニケーションスキルの欠如，および外的または内的な葛藤も含まれている（Gati & Saka, 2001）。そのため，課題が生じて乗り越えていくためには，中学生の段階からキャリアプランニング能力を育成することは重要になってくるといえる。

このキャリアプランニング能力に注目した職場体験活動に、中学校と大学の連携による濱保・岡田（2017）の実践がある。将来設計の見通しと希望をもった進路を考える力や態度を養うことを目的に、大学の授業を体験し施設を見学する中で、社会貢献や職業選択のきっかけ、夢などの話題を提供して自らの生き方を考えさせるキャリア教育が行われた。その結果、学習態度・学習方略、解決意欲が向上する一方、自己有用感が低下したことから中学校と大学が密な連携を事前にすることが課題であると指摘された。しかし、よりよい連携をするためには一層、職場体験活動の目的やねらいを明確にし、それらを中学校と大学が共有し、体験先の実施者もその目的やねらいに応じたプログラムを実施する必要がある。さらには、キャリアプランニング能力に着目した体験活動とするには、将来を見据えた社会の動向やそれに基づく職業観、生き方・働き方についてのガイダンスやキャリアプランニング能力を柱とした内容で授業全体を組み立てることが求められる。そのため、キャリアプランニング能力の育成にあたっては、中学校と大学研究室の実施者が職場体験活動の目的を理解した教材の準備と授業が行えたかどうかプログラム質の担保をするうえで非常に重要になると考える。

このようなことから、Society 5.0の社会を見据えたキャリアプランニング能力の向上に焦点化した職業観・勤労観を育む職場体験活動のプログラムがこれまでに実施されてきたとは言い難い。つまりは、これまでに実施されてきた職場体験活動は、変化が予測できない将来を見通して自分のキャリアを考えて計画・行動するキャリアプランニング能力の視点を育む、「将来への職業を創造し、職業意識を向上させる」といったキャリア発達を促す内容になっていないといえよう。そのため、大学研究室を職場体験先とする時、見学や授業体験だけでなく、大学教員の職業が実社会につながり、中学校の学びとその先の学びが自分の将来とつながっていることを意識させるよう、事前事後学習を含むキャリア・プランニングの視点から職業を創造するキャリア教育が求められるのではないだろうか。さらには、キャリア・プランニングの意義を実施校及び体験先が共有する事前準備と事後指導によってその学習効果は大きく異なってくると考えられる。そのため、実施における一連の流れやキャリア教育としての在り方、プログラムの実施における工夫が課題である。

そこで、本研究では、中学生を対象とした職場体験活動におけるキャリアプランニング能力に焦点化したプログラムの開発を通し、その教育効果を検討した。

2. 方法

2. 1 調査対象者 中学校2年生83名のうち、6名を実践群、77名のうち欠損がある者を除いた64名を統制群とし、欠損値を除いた者を尺度ごとの有効回答とした。参加者の募集は、4月に職場体験活動の説明会を実施し、大学研究室訪問以外にいくつか用意された職場体験先の希望調査から中学校教員が調整して職場体験先が決定された。なお、本研究の対象校である中学校の選定は、職場体験活動の改善を希望する教育委員会が大学と共同研究で行う職場体験活動に賛同する学校とし、1年かけて指導主事と筆者らで打ち合

わせを行った。本研究の趣旨に賛同する中学校の選定に向け、中学校校長会及び関係機関に教育委員会が趣旨を説明し、その後、本研究の実施について了解を得られた中学校を教育委員会が選定した。そして、学校長、職場体験活動の担当教員2名、教育委員会、第一筆者と打ち合わせを行い、キャリアプランニングに焦点化した大学研究室訪問による職場体験活動の意義と目的、実施の流れ、役割分担などを確認し、大学の倫理審査委員会の承認を得て実施されるに至った。

2. 2 調査内容 学級担任に依頼し、学級ごとに集団で実施された。実践前後にフェイスシートで学年、性別について尋ねた後、以下の質問への回答を求めた。質問紙のフェイスシートには上記に加えて、倫理的配慮として質問全てに対して拒否権があること、拒否しても不利益が生じないこと、途中で回答を止めてもよいことを明記した。①中学生用キャリア意識尺度（新見・前田，2008）：「人間関係形成能力（9項目）」、「情報活用能力（5項目）」、「将来設計力（6項目）」、「意思決定力（7項目）」27項目4因子6件法（「1. とてもそう思わない」～「6. とてもそう思う」）（Appendix 1），②基礎的・汎用的能力尺度（文部科学省，2011）：「人間関係形成・社会形成能力（3項目）」、「自己理解・自己管理能力（3項目）」、「課題対応能力（3項目）」、「キャリアプランニング能力（3項目）」12項目4因子4件法（「1. ほとんどしていない」～「4. いつもしている」）（Appendix 2），③自由記述による感想：職場体験活動最終日に「3日間の職場体験活動で何を学んだか」、「将来のためにこれからできる具体的なことは何か」を実践群6名に感想の記述を求めた。④他者評価：職場体験活動の担当の中学校担当教員2名、教育委員会指導主事1名から、本実践に対する意見や感想を聴取した。なお、本研究は東京情報大学人を対象とする実験・調査等に関する倫理委員会の承認を得て実施された。

2. 3 授業時期および手続き 総合的な学習の時間に3日間実施された。事前に全生徒に第三筆者によるマナー講座（45分）、実践群に第二筆者が事前打ち合わせ（60分）を行った後、3日間の職場体験活動が行われた。大学研究室訪問の内容は表1のとおりで、オリエンテーション・振り返り・リフレクションは第二筆者、他は各領域の専門家の大学教員6名が行った。なお、実施者は本研究の目的とキャリアプランニング能力の育成について第一筆者から事前に説明を受けた。1日目の「オリエンテーション」でキャリア・プランニングに焦点を当てた職場体験活動の意義と目標を共有してから各体験活動を行

表1 職場体験活動における内容

	1限	2限	3限	4限
1日目	オリエンテーション	プログラミングを仕事にする人達	AIエンジニアの仕事	振り返り
2日目	情報が社会を変え新たな職業を作り出す	映像の仕事	アニメーションの世界	振り返り
3日目	マーケティングの知識を応用して新商品を考えよう	未来の医療と看護師の役割①	未来の医療と看護師の役割②	リフレクション

い、最終日の3日目は振り返りと同時に、3日間の職場体験活動の学びを振り返りを今後の生活にどのように活かすかを生徒全員が発表して共有した。

3. 結果と考察

3. 1 各尺度の事前事後の比較

各尺度得点の分布はヒストグラムを目視し、正規分布から極端な偏りがないことを確認し IBM SPSS Statistics26 で統計解析を実施した。実践群と統制群の中学生版キャリア意識尺度、基礎的・汎用的能力尺度の平均値、標準偏差および群間差、前後変化の有意差検定の結果を表2と表3に示す。中学生版キャリア意識尺度において、統制群の「人間関係形成力」($p < .05$)、実践群($p < .05$)と統制群($p < .05$)の「情報活用力」、実践群の「意思決定力」($p < .05$)に有意な増加が認められた。基礎的・汎用的能力尺度において、実践群の「自己理解・自己管理能力」($p < .05$)に有意な減少、統制群の「課題対応能力」($p < .05$)と「キャリアプランニング能力」($p < .05$)に有意な増加が認められた。介入前スコアを共変量とした共分散分析の結果、実践群と統制群の前後変化の平均値に有意差は認められなかった。

表2 中学生版キャリア意識尺度のStudentのt検定及び対応のあるt検定の結果

尺度	下位尺度	実践群(n=6) 統制群(n=64)					
			M	SD	M	SD	P値 ^{※1}
中学生版 キャリア 意識尺度 (6段階)	人間関係形成力 項目数 9 得点範囲 9~54	前	42.0	4.6	41.7	6.4	.91
		後	41.5	5.5	43.7	6.6	.42
		P値 ^{※2}	.54		.00 **		
	情報活用力 項目数 5 得点範囲 5~30	前	23.3	2.7	22.9	4.3	.80
		後	25.3	2.3	23.7	4.8	.41
		P値 ^{※2}	.02 *		.03 *		
	将来設計力 項目数 6 得点範囲 6~36	前	29.5	4.0	28.7	4.3	.66
		後	29.8	2.5	28.9	4.3	.61
		P値 ^{※2}	.76		.61		
	意思決定力 項目数 7 得点範囲 7~42	前	29.8	5.2	32.0	6.1	.41
		後	32.5	5.1	32.8	5.9	.90
		P値 ^{※2}	.00 **		.11		

※1 Studentの t検定、※2 対応のあるt検定。*: $P < .05$ 、**: $P < .01$

表3 基礎的・汎用的能力尺度のStudentのt検定及び対応のあるt検定の結果

下位尺度	実践群(n=6) 統制群(n=62)						
		M	SD	M	SD	P値 ^{※1}	
基礎的・ 汎用的能 力尺度 (4段階)	人間関係形成社会形成能力 項目数 4 得点範囲 4~16	前	8.5	2.3	10.0	1.5	.03 **
		後	8.3	1.5	9.8	1.7	.04 **
		P値 ^{※2}	.79		.52		
	自己理解自己管理能力 項目数 4 得点範囲 4~16	前	9.0	1.8	9.1	1.7	.86
		後	8.0	1.4	9.2	1.8	.11
		P値 ^{※2}	.04 *		.71		
	課題対応能力 項目数 4 得点範囲 4~16	前	8.8	1.7	9.0	2.0	.89
		後	8.7	1.9	9.5	1.8	.27
		P値 ^{※2}	.82		.02 *		
	キャリアプランニング能力 項目数 4 得点範囲 4~16	前	9.7	1.9	8.4	2.3	.20
		後	9.8	1.5	9.3	2.2	.57
		P値 ^{※2}	.74		.00 **		

※1 Studentの t検定、※2 対応のあるt検定。*: $P < .05$ 、**: $P < .01$
統制群は欠損がある2名を除く人数

3. 2 自由記述による感想

①職場体験活動の学び：職場体験活動で学んだことについて、KJ法で分析した結果、21

の回答を得て、「意義と理解 (3)」「IoT 社会 (3)」「行動・改善 (2)」「キャリアプランニング (2)」「選択 (1)」「コミュニケーション (1)」の 8 つに大別された。職場体験活動のねらいであるキャリアプランニング能力に関連した気づきや感想が多い傾向にあった。

②今後に向けた具体的な事柄：将来のためにこれからできる具体的なことについて、KJ法で分析した結果、15 の回答を得て、「勉強 (4)」「対人関係 (2)」「キャリアデザイン (1)」「時間の過ごし方 (1)」「技術の向上 (1)」「目標への挑戦 (1)」「資格取得 (1)」「感謝の気持ち (1)」「毎日の生活 (1)」「レジリエンス (1)」「判断力 (1)」の 11 に大別された。学校の授業が次の学びにつながるとし、日々の授業に取り組むことが大切と 4 名が述べた。他回答全てでもできることを具体的に挙げた一方、1 名が無記入であった。その生徒は内向的な特性で、周囲に頼り自主性が低く基礎学力も影響し、自分自身の方向性や行動について考えることができず深い学びにまで至らなかったのではないかと考えられた。

3. 3 他者評価

実施後に中学校教員から、中学校では体験することができない情報機器を使った体験が多く非常に有意義で全生徒が興味関心を持って集中して参加していた上に、職業について広い視点から捉えることができる内容であったと感想が述べられた。また、教育委員会指導主事からは、プログラミングの体験や映像制作の仕事の一部を体験することで実際にその難しさを知る、また、プログラミングや映像が生活を豊かにしていることに気づかされ、さらには、難しいと思われた IoT 社会やキャリアプランニングについて生徒にわかりやすい説明がされたことで、予想のつかない将来や新しい職業があることを理解することができたとし、中学生の発達段階にあう内容であったという感想を得た。

4. おわりに

以上より、キャリアプランニング能力の育成に向けた本実践は、介入前後の各能力の変化量に差は認められなかったが、実践前後の変化の修正平均は中学生用キャリア意識尺度の「情報活用力」「将来設計力」「意思決定力」は統制群より実践群が高かった。一方、基礎的・汎用的能力尺度の下位尺度得点の前後変化の平均値は実践群が統制群より低く、介入効果を支持する結果は得られなかった。今回このような結果が得られた理由として、実践群と統制群の介入前には「人間関係形成社会形成能力」を除き、明確な差はなかったが、実践群は 6 名と誤差が大きかったことで介入効果が認められなかった可能性がある。

自由記述ではキャリアプランニングに対する理解と気づきの深まりがみられた。これについては、様々な仕事とその先につながる職業に従事する人が情報社会の中で働き、その先の社会を作るといった内容が生徒に理解されたのではないかと考えられた。そのような中で、キャリアプランニング能力についてその言葉自体を用いて説明したこと、各実施者が本研究の目的やねらいに沿った授業を展開したことに加え、中学生にわかるように資料を用いて説明したことが効果に影響したと考えられた。また、教員及び教育委員会主事による他者評定では参加生徒の主体性が評価され、授業内容は概ね肯定的評価を得た。

今回の教育効果の結果を踏まえて、キャリアプランニングに焦点をあてたプログラムの実施における工夫が4つ挙げられる。

第一に、教育委員会、中学校、大学における連携である。キャリアプランニングに焦点化する意義とプログラム作成に関する事前打ち合わせを、教育委員会と1年間かけて行った。中学校とも打ち合わせの時間を持ち、その意義とプログラムの目的・内容を共有した。さらにはそれぞれの役割を明確にし、十分な時間をかけて実施の準備や運営などを検討した。これについては、但田（2018）が地域連携の視点からみた中学校との連携は、地域活動や学校の活動に大学が積極的な参画をすることが信頼関係を築くことになり、相互に協力する体制の構築は重要であると指摘している。本研究では、中学校の担当教員、大学の学内外の連携調整の担当（第一筆者）を設けて実施した。大学が可能な体験内容、指導者のリストを作成すること、さらには、効果的な体験活動を行うため、双方の担当者による事前打ち合わせが重要であるという指摘（但田，2018）があるように、本研究における役割分担に基づく連携が効を奏したといえる。

第二に、キャリアプランニングに焦点化した職場体験活動のねらいと目的を授業者間で共有したことである。これにより、授業者の内容がそれぞれの専門性に基づく内容であったとしても、「生徒が将来への職業を創造し、職業意識の向上」を目指すことを基盤として、ねらいに沿った体験活動が展開でき、生徒にとっては様々な領域を学んでいながら、キャリアプランニングを柱として大学教員の仕事を通じて様々な職業を知ることになったようである。つまりは、予測のつかない将来を踏まえた職業観・勤労観を考えさせてから自分の将来に向けた学びや生き方を考えさせるといった連続性、あるいはねらいを共有化した活動は、生徒にとってキャリアプランニングを軸として気づきや振り返ることに直結したと考えられた。濱保・岡田（2018）は、職場体験活動では、「職業観・勤労観」を獲得させるプログラムを最初に行い、次に「社会性」と「自己有用感」を獲得させるプログラムを行わなければ、「将来設計・展望」の獲得は難しいと指摘している。将来を見据えた職業とキャリアプランニングの意義に始まり、毎回の体験活動とシェアリング、そして、自分の将来に向けた設計と行動について考えるリフレクションを組み込んだ本実践は、キャリアプランニング能力の育成に効果が期待できると考えられる。

第三に、オリエンテーションや1日の振り返りの時間、リフレクションにおいて、「キャリアプランニング」ということば自体を用いて、説明や振り返りが行われたことにある。このことが、キャリアプランニングの視点から気づきを深め、生徒自身がこれからの学校生活の過ごし方や自分の生き方を考えるようになったと考えられる。生徒の振り返りにおいても、「学校の勉強を大事にする」ことや日常生活で「対人関係を大事にする」ことがまとめられていた。

これについては、達成目標理論（遠藤・中谷，2017）で説明できる。この達成目標理論における「課題をやり遂げることを通じて理解を深め、自分の能力を伸ばすことを目指す熟達目標」は、内発的調整方略（課題に対する興味や価値を高めてやる気を高めようとす

る方略)を促し、それが学習習慣を促進するとされている。つまりは、キャリアプランニング能力を自分の将来といった身近なことに関連付けて興味を高め、学習内容の習得を多角的な視点から捉えてやる気を高めるなど、内発的調整方略との関連が示されたと考えられる。また、内発的調整方略は学習習慣と関連があることから、学校での学習への取り組みについて工夫してモチベーションを高めようとする生徒の振り返りは、継続的な取り組みを促進し、キャリアプランニング能力を育むための学習の定着にも結び付くと考えられる。

第四に、学校との事前の連携である。学校はその学校独自の考え方や取組があるため、本実践でも、目的やねらい、実施方法について教育委員会や中学校と何回もすり合わせを行ってきた。なかでも管理職から、「生徒にとって難しい内容ではなく楽しい体験に」と言及があったことに対しては、モチベーションを維持しつつキャリアプランニングの知識の獲得と深い学びについて話し合いを重ねることが体験活動への理解を深めてもらうことにつながった。また、生徒のモチベーションについては、職場体験先は第一希望かどうかの影響することから(濱保・岡田, 2018)、参加者の特性や選択過程等の情報共有も教育効果を高めるためには重要になる。

以上より、キャリアプランニング能力を育成するためには、関係者の連携と情報共有、「職業観・勤労観」「コミュニケーション」「自己有用感や自己肯定感」「将来設計・展望」の獲得を目指すことが重要になってくるといえよう。そして、本研究上の限界と今後の課題は、実践群の人数の少なさにある。さらに大規模な調査による職場体験の効果検証が期待される。

謝辞

本研究に協力していただきました中学校関係者及び生徒の皆様、東京情報大学教員の皆様に深く御礼を申し上げます。なお本研究は、平成31年度～令和2年度東京情報大学総合情報研究プロジェクトで助成を受け、千葉市教育委員会と共同で実施されました。

引用文献

Angela D.B., Kerr B.B., Kris C.M., & Kim D.W. (2004) Junior High Career Planning: What Students Want. *Canadian Journal of Counselling / Revue canadienne de counseling*, 38, 104-107.

千葉市 (2017) 「千葉市のキャリア教育～生涯を通じたキャリア発達の支援に向けて～」, Retrieved from https://www.city.chiba.jp/kyoiku/gakkokyoiku/kyoikukaikaku/documents/290802_cyariakyouiku.pdf

中央教育審議会 (2009) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」, Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf

- 遠藤志乃・中谷素之 (2017)「中学生における動機づけ調整方略と達成目標および学習習慣との関連」, 『心理学研究』 **88** (2), 170-176.
- Gati, I., & Saka, N. (2001) High school students' career-related decision-making difficulties. *Journal of Counseling and Development*, *79*, 331-340.
- 濱保和治・岡田大爾 (2017)「キャリア発達を促す総合的な学習の時間の実践的な研究－中学校と大学の連携を通して－」, 『広島国際大学教職教室教育論叢』 第 **9** 号, 95-103.
- 濱保和治・岡田大爾 (2018)「キャリア教育における教育効果の測定に関する実証的研究－職場体験活動における生徒の意識に関する効果測定を通して－」, 『広島国際大学教職教室教育論叢』, **10**, 121-130.
- 文部科学省 (2011) 『キャリア教育の手引き』, 教育出版, 1-199.
- 文部科学 (2018)「第3期教育基本振興計画」, Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/1406127_001.pdf
- 文部科学省 Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース (2018)「Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる, 学びが変わる～」, Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_002.pdf
- 新見直子・前田健一 (2008)「中学生版キャリア意識尺度の開発」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部』 第 **57** 号, 225-233.
- 小川潔・岡田大爾 (2018)「キャリア教育が大学生の自己形成に及ぼす影響－基礎的・汎用的能力に関する大学生の自己認識を通して－」, 『広島国際大学教職教室教育論叢』 第 **10** 号, 49-57.
- 但田勝義 (2018)「中学校におけるこれからのキャリア教育と大学との連携」, 『稚内北星学園大学紀要』 第 **18** 号, 7-18.
- 戸田 浩暢 (2016)「大学生が振り返る中学校時代のキャリア教育」, 『広島女学院大学人間生活学部紀要』 第 **3** 号, 49-57.
- 山田智之 (2011)「職場体験による中学生の進路成熟及び自律的高校進学動機の変容と影響要因」, 『キャリア教育研究』 第 **30** 号, 1-14.

(Appendix1)

中学生用キャリア意識尺度(新見・前田, 2008)

＜第1因子 人間関係形成能力＞

- 2 友だちのよいところをもっと知りたいと思う
- 5 友だちが困ったときには、助けることができると思う
- 8 友だちの気持ちを大切にすることができると思う
- 11 自分がいやなことは、友だちにはっきり言うべきだと思う
- 14 友だちのよくないところは注意すべきだと思う
- 15 ふざけて友だちをからかわないようにしたいと思う
- 17 違う学年の人とも話をしたいと思う
- 20 自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う
- 24 友だちに悪いことをしたと思ったら謝ることができると思う

＜第2因子 情報活用能力＞

- 1 高校ではどんな勉強するのかを知りたいと思う
- 9 わからないことは、先生や友だちに聞くことができると思う
- 12 調べたことを人にわかりやすく発表することができると思う
- 18 働いている人はどのようにして、その職業についたのかを知りたいと思う
- 27 学級の係や当番の仕事は、きちんとやるのが大切だと思う

＜第3因子 将来設計力＞

- 3 そうじや係の仕事は自分がしなくても他の人がしてくれると思う *
- 6 みんなで決めた係や仕事は、きちんとやりたいと思う
- 10 やる気になったら、家のそうじや手伝いができると思う
- 13 子どもは、将来のためにしっかりと勉強すべきだと思う
- 16 計画や時間を決めて勉強したいと思う
- 22 やる気になったら、集中して勉強することができると思う

＜第4因子 意思決定力＞

- 4 何でも最後は自分で決めたいと思う
- 7 みんなと意見が違って、自分の意見を言うことができると思う
- 19 すぐにできなくても、できるまで頑張ろうと思う
- 21 失敗しても、あきらめずに、うまくいくまでがんばろうと思う
- 23 友だちとけんかしても、うまく仲直りができると思う
- 25 難しいことでも、やる気になったら、できると思う
- 26 自分のしたことには自分で責任をもつのが大切だと思う

* 逆転項目

(Appendix2)

基礎的・汎用的能力尺度(文部科学省, 2011)

＜第1因子 人間関係形成・社会形成能力＞

- 1 友だちや家の人の意見を聴く時、その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか。
- 2 相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。
- 3 自分から役割や仕事を見つけたり、分担したりしながら、周知と力を合わせて行動しようとしていますか。

＜第2因子 自己理解・自己管理能力＞

- 4 自分の興味や関心、長所や短所などについて、把握しようとしていますか。
- 5 気持ちが沈んでいる時や、あまりやる気が起きない物事に対する時でも、自分がすべきことには取り組もうとしていますか。
- 6 不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしていますか。

＜第3因子 課題対応能力＞

- 7 分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、だれかに質問したりしていますか。
- 8 何か問題が起きた時、次に同じような問題が起こらないようにするために、何をすればよいか考えていますか。
- 9 何かをする時、見通しをもって計画的に進めたり、そのやり方などについて改善を図ったりしていますか。

＜第4因子 キャリア・プランニング能力＞

- 10 学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。
 - 11 自分の将来について具体的な目標をたて、その実現のための方法について考えていますか。
 - 12 自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか。
-